

### 余語トシヒロ 舟と温室

愛知県渥美半島の太平洋岸を浜浜という。電照菊に始まる日本有数の施設園芸地帯で、温室団地が十数キロにわたって延々と続く。四〇年近く前、その一面に無断で車を乗り入れ、道に迷ったあげくに脱輪して途方に暮れたことがあった。そんな私を助けてくれたのが、偶然にも園芸生産組合長の葉山さんであった。しかも遅くなったからと夕食までお世話になった。問わず語りに伺ったことでは、組合員は元々は表浜の漁師であった。村には数隻の船があり、それに分乗して一本釣りや網漁で生計を立てていた。一本釣りは各自の腕のみせどころで、漁師の競争心を煽るものであった。網漁では、全員の呼吸を合わせた協力が漁獲を左右した。風を読み潮の変化を予測して出漁を決めるのは長老の役割であり、その命令は絶対でさえあった。そして得られた獲物は、浜で船の帰りを待つ老人も含めて全て平等に分配された。それが貧しい漁村の慣わしであったが、自給のための畑仕事は女手に任せられ、一段と低くみられていた。そんな漁師にとって、たとえ沿岸漁業で食えなくなっても、陸へ上がって農業を行うには躊躇があった。しかし他に選択の余地はなく、村で一丸となつて施設園芸に取り組むこととなった。幸いなことに、漁師にとって畑の所有にはさほど執着心はなかった。そこで全員の畑を一カ所に集め、管理施設を含む二〇数棟の温室団地を造成した。そして組合員には、土地の所有面積に関係なく、二棟ずつの温室を割り当てた。

団地は勿論のこと共有で、施設は共同で管理される。しかし各棟では、組合員が各自の栽培技術を競う。それは文字どおりガラス越しであり、船の上での一本釣りと同じく公開された競争である。また、何を栽培するか、農薬をいつ散布するかは協議のうえでの命令である。舟の慣習を温室に移転したことで、栽培技術は飛躍的に向上し、強い組織力は販路の確保につながり、ついには朝日農業賞を受けるまでになった。酒を飲みながら漁師の誇りを語る葉山さんに魅せられ、その後も数回お邪魔して酒の相手をすることとなった。そんなある日、組織目的と個人感情の葛藤に話題が及んだ。男だけの舟と違つて主婦も参加する温室、技術の差が収入の違いを生む農業、組合に個人の嫉妬心や争いが持ち込まれては組織として存続できなくなる。それが避けられたのは、男性には氏子や檀家組織の名誉職、女性には主婦の慰労会や嫁の料理教室等、村社会には家の数以上に生活組織があり、不満解消と問題解決の役割を担っていたことである。生産組織は、そんな村社会の一部でこそあれ、決してそれ以上のもではない。地域社会における組織の多元性、生産における支配・協同・競争の三つの組織原理の追求、彼から教えられた地域社会と組織の関係は、私のその後の調査研究の基本的な視点となった。今は故人となつた葉山氏を偲びながら、今も若い日のめぐり合わせに感謝する日々である。

余語トシヒロ／日本福祉大学国際社会開発研究科客員教授

1941年生まれ。北海道大学農学部卒。  
日本工営株式会社（10年）、国際連合（25年）勤務後、現職。  
著書：地域社会と開発（共著）古今書院・他。